愛のない結婚を後悔しても遅い

離縁を望まれたスパダリ令嬢、溺愛の限りを尽くしたら
孤独な公爵令息に懐かれすぎています

CHARACTERS
サリア
カイルの妹。
カイルと共にシリルを虐げる。
シーラ
ブライトン家令嬢。
辺境で国を守る凄腕の軍人で、
並外れた戦いの才覚と
強靭な精神の持ち主。
オトギリ
隣国アコカンテラ帝国の
第五皇子。
シーラを目の敵にする。
カイル
ガードナー伯爵令息。
シリルの従兄だが
彼に辛くあたる。
シリル
トラティリア公爵家令息。
心優しく優秀だが、
ある事情で心を閉ざしており……
オーランド
第三王子にして王太子。
シリルにとっては
苦手な相手だが……？
アーサー
第二王子だが軍に身を置く、
シーラの友人。
本名はヒュー・アレキサンドライト。

第一章

「僕は君を望んでいない。状況が整い次第、離縁させてもらうつもりだ。それまでは大人しく、控えて過ごしてほしい」

結婚相手であるシリル・トラティリアが、出会い頭に発した言葉であった。

トラティリア公爵家とブライトン辺境伯家、両家顔合わせの場である。

彼の両親は顔を赤くしたり青くしたりしていた。だが、叱りもせずしょんと肩を落としてこちらの様子をうかがうばかりで、お話にならない。

我が領土ブライトン領は隣国との境にある、いわゆる辺境の地だ。

そこからこのトラティリア領まで、五日かけて訪れたところだった。ブライトンの私軍である、銀軍の軍馬を走らせて五日である。

馬車ではない。馬車であればもう三日はかかるだろう。

軍馬にまたがって遥々(はるばる)やってきた私たちに向かっての、この言葉である。

ろくに休憩もさせず、玄関に迎え入れてすぐの一言だった。

父のほうから、パキッとなにかが折れた音がした。手に持っていたのは確か、鉄でできた太めの

杖だったと思うが……

ブライトン辺境伯である父はこの国の英傑で、ものすごく強い。

一騎当千といっても過言ではないほどの強さを誇る。若い頃に戦争で武勲をあげ、褒賞として母であるサラ・ブライトンへの婿入りを望んだ。

母は母でこの国の中でも指折りの文官であった。

頭がよく、男に交ざって王宮でバリバリ働いていた。数々の同僚、上司たちをその言葉で一網打尽にしてきた切れ者だ。

そんな二人が恋に落ちた。一緒になるための作戦を母が立て、父はその作戦を出鱈目な強さでたやすく遂行し、当たり前のように結ばれたのだった。

そんな二人の強い部分を受け継いだ私、シーラ・ブライトンは銀軍で副司令官をしている。

私には妹がいる。スイ・ブライトンとセイ・ブライトン。穏やかで可愛らしい、天使のような妹たちだ。

その二人に縁談が持ち上がった。

領地経営に行き詰まったトラティリア公爵領より、次期領主の補佐兼妻としてブライトン家の娘をと求められたのだ。

嫡男であるシリルが仕事に専念できるよう助けてやってほしい、と。

それを聞いた私は激怒した。そんな甲斐性なしのところに、可愛い天使を嫁がせるわけにいかない。

「私が行きましょう、父上」

と自ら赤札を受け取った。

妹と両親は断ればいいと言ったが、断ればなんらかの不利益を被るかもしれない。私なら大丈夫だと言って押しきったのだ。

「お淑やかな妹のほうなら我慢してやろうと思ったが、下品な姉のほうだなんて。いいか？　僕の前に極力現れないでもらいたい。いずれ、この屋敷の主人は僕になる。異論を唱えても無駄だと先に言っておこう」

母のほうからブチブチとなにかが千切れる音がした。確か母が手に持っていたのは我が領土で盛んに生産している絹を何重にも重ねて織り上げた膝掛けだ。

私は、目の前に現れた敵に身震いした。

ブルッと体を震わせた私を見て満足したのか、シリルはさらに続ける。

「ふん、今さら理解したのか？　自分が愛されないと。女は寄生することしか考えていないからな。後悔しても遅い。頭の悪い人間は小さくなって過ごしていればいいんだ。この、人殺し」

「お言葉ですが、人殺しとは？」

笑顔のまま、なるべく優しく問いかけたつもりだったが、あちら側の者たちは皆一様に顔を真っ青にした。使用人を含め全員だ。

「へ……辺境は野蛮な土地だろう？　戦争で多くの者を殺したんだろう？　人殺しの妻なんてお断り……」

その言葉にカチンと来て、つい。

ペチン!! とシリルの両の頬を両手で挟み、顔をぐいっと近づけた。

「その戦争に出て戦う者があるからお前たちはのほほんと暮らせるのだろう。恐れ慄き、恐怖で動かない足を懸命に運び、我が国のために戦う戦士を侮辱するなこの蛆虫が。お前が戦場に行けるというのか？　行けないだろう口先だけの青二才。なんなら敵勢を押さえ込むのをやめようか。あっという間に侵略されるぞ？　それとも貴様がオハナシでもして撤退させるのか？　ん？」

シリルは池の中の魚みたいにパクパクと口を動かしている。

私は軽く頬を打ち、軽く口答えをしただけなのだが、彼の瞳からは先ほどまでの生き生きとした戦意は感じられなくなっている。

「シーラちゃん、そのク……おほん。おぼっちゃまは軍の若者ではないのよ。もっと優しくお話ししなさい」

「母上。これでも優しくしています」

軍の若者だったら打ち込み千回でも足りないくらいだ。苦言を呈しただけなのだから、ものすごく優しくしているつもりなのだが、あちら側一同はさらに顔色を悪くする。何人かの若いメイドは額に手を当てて倒れてしまった。

軟弱な人間もいたものだ。私ごときの殺気に当てられるとは。

「こ……こんな乱暴者、お断りだ！」

シリルはなんとか私の拘束から抜け出し、ずりずりと後ずさりながら父母の後ろに隠れてし

まった。
「シリルちゃん、あなたは一旦お部屋へ下がりなさい。ね、お母様に任せて」
シリルの母親が絹でも撫でつけるがごとく優しく、穏やかに彼を宥(なだ)める。
「当たり前です！　あなたたちのせいでこんな！」
シリルはというと、プリプリ怒りながら退室……いや、玄関ホールから部屋へ帰っていった。

その後、きちんと応接室へ案内された私たちは、ご両親から平謝りされることになった。
「昔は、もっと思いやりのある子だったのです。でも、アカデミーでいじめにあってからというもの……他人を攻撃ばかりして、領地の経営も学ぼうとせず、ずっと部屋にこもって……」
ハンカチで目頭を押さえながら夫人が弱々しく言い訳をする。
応接室は落ち着いた紺色で整えられている。金具部分は銀色で縁取られており、とても清潔感のある部屋だ。
この夫人はお淑やかでセンスもよく、優しい女性なのだろう。
「ほほう。では、次期領主の補佐とはどの程度のことを言っておられるのかな？　私の娘はどう使われるのだろうか」
父上がうぅん、と吠える。
夫人はびくりと肩を震わせ、トラティリア公爵の手をギュッと握る。
「お怒りは……ごもっともです。補佐ではなく、ほぼ……」

「影か。ゴースト領主という感じかな？」
私はこのピンと張り詰めた空気をゆるめるべく、努めて明るく言い放った。
あちらのご両親は口をパクパクと動かして、なんとか取り繕おうとしている。我が両親はその姿を見て豪快に笑って見せた。
「ははは！　なんとまあ、ブライトンを影にしようとはな。王家ですら我が家を影として従えられなかったというのに」
ダン！　と床に杖の先を叩きつける。柔らかい石でも使っているのか、父上の足元にビシッ……とひびが入った。
「なぁ、ザガード・トラティリア。そちらはなにを差し出す？」
父上は殺気混じりの恐ろしいオーラを少しずつ出しながら、トラティリア公爵を射殺さんばかりに見つめた。耐えきれなくなった夫人は真っ青な顔をして、今にも気を失いそうだ。
トラティリア公爵は一枚の紙を机の上に出した。
「この地図を見てください。……狭いですが、特別な土地です。この地を息子ではなくシーラ嬢が引き継げるよう、公的文書を残します」
そう言って地図に記された小さな山を指差した。その手はわずかに震えている。
「グラゴーリア山。金の採れる山だな。いいのか？」
「息子はああ言っているが離縁などありえない。そんなことをしたら……あの子は生きていけない。だから、支えてほしい。私たちは先に死んでしまうから……」

「いや、私が先に死ぬことだってありますよ。争いが起これば私は出陣しますから」
自分たちの責任を放り投げようとするトラティリア公爵に苛立ち、意地悪な発言をしてしまった。
私の一言を聞いた公爵はサァ、と青くなる。
嫁ぎさえすればもう出陣はしないと高を括っていたのだろう。というか、そもそも彼らが望んだのは私ではなかったのだから、彼らからしたら想定外にもほどがあったのかもしれない。
しかし、他国との接地を守る唯一の要である辺境伯領の子を嫁に望んでおいて、少しもその可能性を考えなかったのだろうか。
交戦があることくらい平民ですら知っているのに。親子そろってお花畑だったかと心の中で思っていたら、父上の口からまったく同じ言葉が出てきた。
「親子そろってお花畑では骨が折れるな。シーラ、やはり断ろう。お前にはもっと……」
「お受けします」
「そうだろう、もっと……は？」
「お受けします。その代わり、私は軍に所属したままにさせていただくし、この山もいただきます」
「一目惚れでもしたの？」
母上がものすごーく不思議そうな目で私を見つめる。
確かに、シリル・トラティリアは美しい顔をしていた。
外に出ないからか透けるような白い肌に、整った目鼻立ち。長い睫毛に青く澄んだ瞳、少し切れ

長の綺麗な二重の目。
肩甲骨の少し下まで伸びたホワイトブロンドの髪は、彼が動くたびにキラキラと輝いていた。
「私の好みは大木のようなずっしりとした人です。吹けば飛ぶような優男は好みではありません」
「じゃあ、なぜ？」
「手ごわい敵ほど倒してみたいから、ですかね」
トラティリア夫妻は涙を流し……喜んでいるのだと思いたいが、今後を思って悲しんでいたのかもしれない。

翌朝。
母上と父上は長く辺境を空けていられないので、一晩だけトラティリア公爵家に滞在して、帰っていった。朝早くの出発だったが、トラティリア夫妻は豪華な朝食でもてなし、きちんと見送りをしてくれた。
屋敷の使用人たちも恐れ慄きながら、顔を出してくれた。
シリルだけが現れなかった。
この屋敷の者たちは皆、優しいのだ。優しすぎて、傷ついた坊ちゃんを腫れ物のように扱っている。
それから庭に繋いでおいた愛馬のアサギをブラッシングしながら屋敷を眺めていると、三階の窓がバタン！　と閉められた。

見られていることには気づいていた。その子供みたいな反応がおかしくて、つい一人で笑ってしまった。少しすると、バタバタとやかましい足音が庭に響く。
「なななななな!!　なんでいるんだ!!」
「あそこからここまで来るのにこんな時間がかかるのか？　そんなに息を切らすほど走って？　お前の足はどうなっているんだ」
「そんなことどうでもいいだろう！　なんで帰ってないんだ!!　帰れ!!」
「帰らない」
シリルは寝巻き姿のまま、慌てて庭に飛び出してきたらしい。胸元の布がはだけて薄っぺらな胸板が露わになっている。
「は？　か……!?」
私が間髪容れずに答えたのが意外だったのか、シリルは一歩後ずさりながら言葉に詰まっていた。
「帰らない。私はお前の妻になる」
空と同じような青い瞳をじっと見つめると、その下の頬がかぁ！　と赤くなった。
「つ、妻？　いらない！　そんなもの……！」
顔を真っ赤にして怒ったシリルは、プイッと後ろを向いてしまった。
肩が小さく震えている。
あぁ……そうか。
「心配ない。私がお前を守る」

小さく震えていたシリルの肩がビクッと大きく跳ねた。
先ほどの大声に興奮したのか、アサギがブルルと小さく呻る。そっとアサギの頬を撫でて宥めた。
「私が守ってやるから大丈夫だ」
辺境にやってくる新兵たちは皆、死の恐怖に震えている。
皆、強がろうとした結果、無理に他人を攻撃しようとするのだ。
だけど、肩が、瞳が、唇が震える。どうしようもない恐怖で。
だから皆、守ってやらねばならない。
少しでも安心してもらえるようにと、父上はいつも「俺が守る」と兵士たちに言っていた。
その背中を見て、いつからか私も真似するようになっていた。
シリルは怯えているのだと、思った。
守ってやらねばいけないと、純粋に思ってしまった。
後ろを向いたままの彼がどんな顔をしているかはわからない。
だが、先ほどまでいかっていた肩がストンと落ちている。
私がアサギの手綱を握って馬小屋へ歩き出すと、シリルはなにも言わず、トボトボと歩いて屋敷へ戻っていった。
ふと、辺境に残してきた部下たちのことを思い出した。
女なんかに、と初めは反抗的であったが、ともに過ごすうちに心を寄せてくれるようになったものだ。

シリルはどうだろうか。
そんな風に考えながら、初めて顔を合わせた時に彼が見せた、強がった顔を思い出す。
屋敷の中からドタドタと乱暴に走る足音が聞こえた。
「ふっ、あの根性も性格も叩き直さなければいけないようだな。アサギ、私の旦那様はなかなか手ごわそうだ」

朝の自主訓練を終えた私は庭の手入れでもしようかと思い、庭師に道具を借りて中庭に出た。
そこでは、トラティリア夫人がお茶をしていた。
「あら、シーラちゃん！　こっち！　こっちよ！　お茶しましょう？　ね？　あらそれ、く……クワ？　なんでかしら？　まぁいいわ、おいしいケーキがあるのよ」
「トラティリア夫人、お招きありがとうございます。ではご一緒させていただきます」
夫人はシリルと同じプラチナブロンドの髪を持つ女性だ。私よりも頭一つ分くらい身長が低い。シリルとは少し顔立ちが違い、大きな丸い瞳は少し垂れ気味で、小さな唇が幼げな印象を与える。全体的に可愛らしいのだ。
彼女は、なぜか顔を赤くして私をボーッと見つめている。
「ねぇシーラちゃん、その……よかったらおかあさんって……呼んでくれないかしら？　嫌かしら？」
「お義母様」

この人は殺気に当てられると気絶してしまう可能性があるので、なるべく穏やかに接しなければ。そう思って、領地にいた子供たちに笑いかけるように、なるべく優しい笑顔をつくった。
「っ！　あ、ごめんなさい。あの……あのね、シリルが……あんなことを言ってしまったことを謝りたかったの。ごめんなさい」
夫人は瞳を潤ませながら本当に申し訳なさそうにシュンと肩を落としてしまった。……小動物のようで、大変可愛らしい。
そんな姿を見てつい、ふ、と笑みがこぼれた。
「お義母様、お気になさらず。謝罪でしたら、いつか本人からしていただきます」
「でもね！　せっかく来てくださったのに、あんな……」
「このケーキ、おいしいですね！」
目の前に出されたイチゴのタルトを口にすると、食べたことがないほどにおいしかった。必死に謝ってもらっているところだったというのに、つい感想が口をつくほどだった。
「でしょ⁉　でしょ⁉　シリルが作ったのよ」
夫人は先ほどまでのしょんぼりした顔はどこへやら、嬉しそうに笑顔を振りまく。
それにしても、こんなに素晴らしいケーキが作れるとは……あれでシリルは繊細で努力家なのかもしれない。
「そうでしたか。素晴らしい腕前ですね」
「朝食もシリルが作ったの。昨日、言いすぎたのが恥ずかしくて出てこられなかったのだけど。本

当にごめんなさい。私たち夫婦があの子の分まで貴女を大切にします」
きっと彼女は、息子のことが心配で仕方がないのだろう。
心配するあまり、全ての責任や義務からこうやって守ってきたのだ。
そうして彼は、どんどん甘えて過ごすようになったのかもしれない。

お茶を終えた後、領地を見てまわろうと思いアサギを迎えに行くと、すでに誰かが馬小屋に来ていたようで、話し声が聞こえた。
「これは、馬蹄を替えたほうがいいな。長い距離を走ってきてくれたんだろう？　ほら、足を出してくれ。とりあえず小石だけでも取ってしまおう」
アサギは気難しい馬だ。気性の荒い牡馬。
彼が怒ることなく、ほぼ初めて会う人間を相手に黙って足を出しているのを見て、驚いた。
ブラシで丁寧に足の裏をマッサージしている横顔は、昨日や今朝目にした鬱々(うつうつ)とした暗い表情と打って変わって、とても優しい。
「馬が好きなのか？」
「うわ!?」
「しぃ。大きな声を出してはだめだ。馬は耳がいい。驚いてしまう」
後ろからそっと近づき声をかけると、シリルは驚いて叫び出しそうになっていた。その反応は予想していたので、そっと伸ばした手で彼の口を覆う。

「!!」
「私たちが無理をして走ってきただなんて、気づいていないかと思っていたが……ちゃんとわかっていたんだな」
「……わ……わかっていた。だが、僕は結婚なんて望んでいない。それに君みたいな……こ……怖い人間は好きじゃない」
ガタガタと震える彼は、夫人と公爵によく似た美しい顔を赤らめて瞳を潤ませている。とても艶やかで美しい。
「そうか、すまなかった。怖がらせたいわけじゃないんだ。なるべく優しく接するようにするよ。アサギ、行こう」
私はなるべく穏やかに聞こえるように少し声を落として、シリルの顔を見ないようにアサギの手綱を引いて馬小屋を出る。
「ああ、そうだ。君が作ったケーキをいただいたよ。とてもおいしかった」
先ほどのケーキのお礼をと思い、立ち止まって一言声をかける。すると彼はさらに顔を赤くしてなにか呟いた。
「……くせに……だろ？」
「ん？　なにか……」
よく聞こえなかったので聞き返そうとした途端に、彼は爆発したように大きな声を出して私の言葉を遮(さえぎ)った。

「男のくせに菓子作りなんかして気持ち悪いと思っているんだろ！　わざとらしく嫌味を言わなくていい‼　母上がわざわざばらしたのか⁉」
うつむいて顔は見えないが、肩が時々跳ね上がる。おそらく泣いているのだろう。
「そんなことは思ってない。素直にすごいと思った。私にはできないから。それに好きなことをするのに性別は関係ない。好きなことを好きと言ってなにが悪い？」
私の言葉を聞いてか、シリルの上下していた肩がぴたりと止まった。
「シリルが嫌ならもう食べたりしない。嫌な思いをさせて悪かった」
この国では、女性が好きな男性に菓子を作って渡す日があるのだそうだ。貴族令嬢はわざわざ菓子作りの教師を招いて習うし、平民は母親や祖母、友達と菓子作りの練習をする。
だから、菓子作りが花嫁修行に入っていたりもする。
私はそういったことを一切していないので、ただ単純にあの美しいケーキを作り出せる技術がすごいと思ったんだが、伝わらなかったようだ。
彼の心の傷は相当深いのだろう。少しの衝撃で爆発してしまう地雷のようだ。
今はなにを言っても彼には嫌われてしまうらしい。とにかくこの場から離れようと思い、そのまま黙って馬小屋を後にした。
アサギにまたがり、領地の見まわりに出かける。
町の中は王都よりも環境が整っているようだった。ゴミや汚水もなく、領民たちは穏やかに笑い合っている。

少し外れた小道に入っても、陶器の鉢に植えられた花が飾ってあったり、夜になれば道を照らすように等間隔で街灯が設置されていたりと、安心して歩けるようになっている。
町の者に聞くと、シリルが関わるようになってから町の整備が進み、過ごしやすくなっているのだ、と皆口をそろえて感謝していた。
公爵たちはシリルが『領地についても学ばず部屋にこもっている』と言っていたが、どうやら違うようだ。
公爵夫人が『以前は優しく穏やかだった』と言ったように、彼は、本当は……
そんなことを考えながら町を歩いていると、あっという間に夕暮れ時になっていた。
私はなにも考えず、町で一番人気という食堂で食事を済ませて公爵邸に帰ることにした。
到着した頃には使用人の多くはもう帰っており、屋敷は静まり返っていた。
中には夜勤のために体を休めている者もいると思い、音を立てないようにそぅっと自分に当てがわれた部屋に向かう。
長い廊下を歩いていると、奥のほうに人の気配がして立ち止まる。目をこらすと、シリルが立っているのが見えた。
「シリル？　そこでなにをしているんだ？」
近づきすぎたら、また怒らせてしまう。そう思い、ある程度距離をとって話しかけてみる。
彼は勢いよくこちらを向くと、怒ったような顔でじっと見つめてきた。
「し……食事の時間にも戻らないとは……どこへ行っていたんだ！」

「領地を見に行っていたんだ。よく整備された良い町だな。明るく清潔で、領民たちもとても穏やかだ。皆シリルのおかげだと褒めていたよ……っと、また余計なことを言ったかな？　私はどうも気が利かないらしい。すまない」
「……僕は彼らの税で生きている。彼らに尽くすのは当たり前のことだ」
「そうだな。私が無礼だった。だが、町のあちこちにシリルの心配りが溢れているようで、私は少し感動したんだ。だからついね」
そう、ついだ。つい、また地雷を踏んでしまったようだ。
早く彼を解放してやらねばと、自分の部屋の扉を開ける。そして、「嫌な思いをさせるつもりはなかったよ」と言って中に入った。
しかしドアを閉めてすぐに、コンコンとノックをされる。
「なんだ？　なにか困り事でもあったか？」
少しだけ扉を開けて応答する。
気まずそうな沈黙の後、ものすごく小さい声でシリルが呟いた。
「……食事は」
「町でとってきたので心配無用だ」
そう伝えると、なぜかシリルは傷ついた顔をして「じゃあいい！」とだけ告げて自分の部屋へ帰っていった。
我々は一応、将来結婚する仲だ。部屋は隣同士である。お互いの部屋の中にある続き扉は、固く閉ざされているが。
部屋に備えつけられたシャワールームで体を清めてベッドに入る。
辺境では一晩中城壁に火を灯しているのでうっすらと明るいが、ここでは必要最低限の明かりしか灯されていない。辺境よりも暗い景色を横になって窓から眺めていると、空に青白い星が輝いているのが見えた。
つい、近くで見たくなって小さなバルコニーに足を向けた。少し肌寒いが、空気が澄んでいて空がよく見える。
ふぅ、と溜め息をつくと、息がほんの少しだけ白く曇った。
「夜は嫌いか？　随分冴えない顔をしている」
すぐ隣のバルコニーで、息を殺してこちらの様子をうかがっていたシリルに声をかける。
げっ！　と小さな悲鳴を上げたところを見ると、夜ではなく私が嫌いなようだ。
「……嫌いじゃない」
小さな声だが、確かにシリルはそう答えた。
つん、とすまして手すりを見つめるシリルの姿はまるで意地を張っている子猫のようで、自然と口角が上がった。
「そうか。私はあまり好きじゃない。眠りについたまま、消えてなくなってしまいそうで」
気の利かない返しをしてしまった。ここへ来て初めて、彼がまともに答えてくれたというのに。
「……夕食を……」

「ん？」
「夕食を用意して……いた。君の分も」
「シリルが作ってくれたものだったらおいしかったろうに。食べたかったな」
あぁ、怒っていたのは食事時に私が帰らなかったからか。
せっかく用意したものが無駄になってしまったから、怒ったのか。
「……明日の朝もなにか作る」
私はシリルの横顔をじっと見つめたまま、彼の小さな声に耳を傾ける。伏し目がちな彼の目は、決してこちらを見ようとはしない。
「シリル、危ない！」
シリルの向こう側に見える空に、一筋の光がすうっと落ちた。遥か彼方に弧を描いて消えていく。火矢か、はたまた弾丸か……
思わずバルコニーの手すりに足をかけてシリルのもとへ跳び移った。
「あ……あああ！　あれは流れ星だ！　そんなことも知らないのか!?」
「流れ星？」
「あぁ、願い事を唱えると叶えてくれるんだ。……あっ！　いや」
「へぇ、それは面白い。それで？　唱え方は？」
「……」
シリルはもともと大きな目をさらに大きく見開いて、こちらをじっと見ている。聞いてはいけないことだったのだろうか？　一子相伝の秘術とか？
「秘密か？　なにか特殊な戦法でもあるのか？　うーん……」
「男がそんな話をするなんて女々しくて気持ち悪いと。僕の友達だった者たち、皆が言う」
「はは、皆とは？　どこの皆だ？　人の話を笑うとは、随分と可愛らしいお友達だな。私はその話、興味がある。流れた星はどこに辿りつくんだ？　どうやって願いを叶えてくれる？」
「……昔読んだ本に書いてあった。星が落ちる前に願いを唱えきれば、その願いが叶うんだと」
「ふーん……やってみようかな！　よしシリル、次に流れ星が出たら……あ！　ほら流れた！　だめだ、速すぎる」
もういっそ、あの星の到着地点を割り出して拾いに行くしかないな。
そんなことを考えていると、シリルがクスリと笑った気がした。
バルコニーにある椅子に腰かけて、しばらく空を見る。
気がついたら朝になっていた。いつの間にか、温かな毛布が何枚もかけられている。
隣を見ると、シリルが一緒になって毛布に巻きついていた。
屋敷の者たちに気がつかれる前に慌ててシリルを部屋のベッドに運び込んだ。そのままバルコニーをつたって、自室に戻る。
結局、流れ星に願い事を唱えることはできなかった。

第二章

「結婚⁉　そんなもの必要ありません！」

僕は、このままでよかった。

他人とは人の才能を妬み、僻み、攻撃してくる。関わらないようにしても、こちらが潰れるまで徹底的に潰しにかかってくる。

アカデミーに入学して唯一よかったのは、そのことに気がつけたことだ。

人は醜い。

それ以上に……自分の愚かさや弱さが許せなかった。

幸いアカデミーの単位をまとめて取得できるほどの頭があったので、もうほとんど出席する必要はない。テストを受けるだけでも、学年一位くらい軽く取れる。

だから僕は領地に引きこもった。誰も傷つけてくることのない、安全な場所に。

ズタボロで帰ってきた僕に向かって、無理を言う者は誰もいなかった。

皆、腫れ物に触れるように、そっと大切にしてくれた。

なのに。

「シリル、いつまでも私たちがあなたを守ってはあげられないのよ。だからね、結婚してあなたの

味方をつくるの」

母と父が勝手に結婚を決めてしまった。

しかも、相手は辺境伯令嬢。大人しく穏やかな娘が来るらしい。

それなら口答えをさせず、すぐに追い返してしまえばいいと作戦を立てていたのに、顔合わせ当日に現れたのは、大きな馬にまたがった三人。

どう見ても穏やかそうじゃない。

真っ黒い、艶やかな毛並みの馬から降りてきた僕の婚約者であろう女性。髪は柔らかな黄金。瞳はとろけるような蜂蜜色。すっと伸ばした背筋に、堂々とした歩き方。

少し吊り上がった目はキリッとして、鼻も高く、とても凛々しい顔立ちをしている。

顔だけ見たら男と言われても納得するほどだが、スタイルがよく、一目で女性だとわかる。

白いトラウザーズと黒いブーツがとても似合っている。

しかし、口を開くと彼女はこちらを攻撃するばかりだった。

やはり、こいつも僕のことをバカにしに来たんだ、そう思った。

その日から、彼女は花嫁修行と称して我が家に滞在することになったらしい。

母のせいで僕がお菓子作りをしていることがバレた。

アカデミーでは女みたいだと散々馬鹿にされた。せっかく作ったものを捨てられ、踏み躙られた。

マズイと、罵られもした。

だけど、彼女はそんなことしなかった。

「すごいな」
と褒めてくれた。
褒められたことが嬉しくて夕食を作ったが、彼女は帰ってこなかった。
そういえば、もう食べないようにすると言っていた。僕が嫌がったから。
夜更けになってやっと帰ってきたと思ったら、外で食事をしてきたと言う。勝手に裏切られた気持ちになって、もういい、と突き放してしまった。
ドアを閉める瞬間の彼女の寂しそうな顔が頭から離れず、バルコニーで頭を冷やしていると、彼女まで外に出てきた。白いナイトガウン姿が美しかった。
白いシャツに黒いベスト、白いトラウザーズや軍服。そんな姿しか見ていなかったが、ゆるやかに開いた胸元から白いレースのネグリジェが見えている。
僕はなるべく彼女を見ないようにした。
先ほど傷つけたはずなのに、彼女は笑顔で話しかけてきた。
言葉は乱暴だが……温かい言葉だった。
僕は、幼い頃から可愛いものが好きだ。人形、絵本、お菓子。
黒や銀よりピンクや金色が好きだ。
夢物語を読んで胸をドキドキさせることや、魔法のような奇跡の話も。
それを知った者たちは一様に「男のくせに気味が悪い」と非難した。
女性たちも、「女々しい」と僕を馬鹿にした。

でも彼女は違った。
もっと教えてほしいと話を聞いてくれた。一緒に楽しもうとしてくれた。
こんな風にされたのは初めてだ。
あんなに嫌がったのに、しかも無礼なことまで言ってしまったのに、少しずつ歩み寄ろうとしてくれる彼女が、とても美しく見えた。
いつの間にか眠ってしまった彼女が冷えないように、部屋からありったけの毛布を持ってきた。
それでも温かくならなかったので、僕も一緒に入って温めることにした。
目を覚ますと朝になっていて、僕はベッドで眠っていた。
彼女にかけたはずの布団は、綺麗にたたんで足元に置いてあった。
外からは、かすかに硬いものを打つ音が響いていた。

＊＊＊

「シリル、おはよう。よく眠れたか？」
薪割りをしていると、三階のバルコニーからシリルが顔を出すのが気配でわかった。
声をかけつつ見上げてみると、昇りはじめた朝日がホワイトブロンドの髪を照らして、とても綺麗に輝いていた。
死人のように真っ白だった顔色も多少マシになっている気がする。斧を左手に持ち替えて手を振

ると、シリルはコクンとうなずいただけで、すぐに部屋へ戻ってしまった。
まだ朝日は昇りきっていないが、屋敷の者たちは働きはじめている。私もタダ飯食らいにならないように働かなければ。
割る薪がなくなったところで、食堂へ向かった。
食堂には、ふんわりと優しいパンの香りが漂っている。
シリルと公爵夫妻がすでに席についていた。
「昨晩は申し訳ありませんでした。これからは黙って外食してこないようにします」
シリルの顔を見ながら昨晩の非礼を詫びる。夫妻はにっこり笑って「気にしないで」と言ってくれた。
シリルはじっと朝食を見つめている。
つられて自分の席に用意された食事に目をやった。
ワンプレートに盛られたサラダ、ベーコン、卵焼き。
焼きたてのクロワッサンと黄金色のスープ。
プレートには、星型にくり抜かれた黄色いなにかが飾ってあった。
「シリル、流れ星を捕まえてくれたのか？　ありがとう」
そうお礼を告げると、シリルはとても儚げに、美しく笑った。
「……」
不覚にも見惚れてしまって、なにも言葉が出てこなかった。

「そ、そういえば、シリルの婚約を祝いにサリアやカイルが顔を出すそうですよ」
夫人も、息子の顔に見惚れたのだろうか、言葉に詰まりながら来客の予定を伝えた。
その瞬間、シリルから穏やかだった笑顔が消えた。そしてガタッと勢いよく立ち上がる。
「また、そうやって、勝手に……僕は会いませんから！」
そう言い放つと、食事も始まっていないのに部屋へ戻ってしまった。
夫人と公爵は「待って！」と声をかけるが、振り返ることもなく扉が閉められる。
残された私はいささか気まずい雰囲気を感じつつも、とりあえずは食事をすることにした。

「サリアとカイルとは、どなたですか？」
食事を終えて尋ねてみると、待ってました、と言わんばかりに公爵が食い気味に答える。
「シリルの従兄妹たちだよ。ガードナー伯爵……私の兄の子だね。シリルと仲良く……してくれているんだが、シリルはあまり関わりたがらないんだ」
「なぜ嫌がるのか、聞いたことはありますか？」
公爵が釈然としないような顔をしていたので、さらに追及してみる。
「ただ、会いたくないと」
公爵と夫人は困ったようにお互いに顔を見合わせて、ふぅ、と小さな溜め息をついた。
「婚約のお祝いなら、私も同席させていただきましょう」
私がそう提案すると、夫人はうつむいていた顔をパッと上げて「いいの!?」と喜びの声を上げる。

ちょうどメイドが食後のコーヒーをワゴンに載せて運んできたので、そのワゴンを借りてシリルの分の朝食と自分の分のコーヒーを部屋に運ぶことにした。
私がやります！　と言うメイドから少し強引にワゴンを奪ってシリルの部屋の戸を叩く。
「シリル、私だ。開けてもいいか？　開けるぞ？」
返事はないが、どこかへ行けとも言われないので思いきって扉を開けてみる。
中に入ると、窓際の椅子に深く座り込んで膝を抱えているシリルがいた。
「……せっかく作ってくれた食事の感想を言っていないから、伝えに来た。こんなに美しい食事を見たのは初めてだ。ありがとう」
「……大袈裟だな」
「私にとって食事といえば、大鍋で煮たスープや肉ばかりだった。こんなに彩り豊かな美しい食べ物があるとは驚いた。それに、この星の形に切られた野菜が可愛らしいので気に入ったんだ」
「それはパプリカという。というか、その朝食は誰のだ？」
「君のだ」
「僕はいらない。食欲がない」
「従兄妹殿が来るからか？」
シリルはビクリと肩を震わせてうつむいた。
「……そう、会いたくない。どうせまた馬鹿にするんだ。それに、いつも部屋のものを取られるし、殴られる」

「部屋に入れなきゃいいじゃないか。それ以前に、その事実を公爵に言えばいい」
「父上には一度言ったことがある。そうしたら『また買ってやる、カイルたちはお前が羨ましいんだろうから許してやってくれ』と。部屋には母上が連れてきてしまうから、入れざるを得ない」
「ふむ。なるほどな」
公爵夫妻は優しすぎる。それは息子にだけじゃない。他人にもだ。
よく領地経営をしてこられたなと思うほどにお人好しである。父が割った床のこともなにも言ってこないしな。
私は落ち込んでどんどん小さくなるシリルの肩をポン、と軽く叩く。
「では、早速私の出番だな」
「え？」
「守ってやると言っただろ？」
シリルは少し驚いたように私の目をじっと見つめ、慌てて首を振る。
「カイルはアカデミーの騎士科に通っているんだよ。力任せではどうにもならない。それにサリアはすぐに泣く。そうなると怒られるのはいつも僕だ」
「それではまた、やられっぱなしでいるのか？　シリルがトラティリアから出ていくことができないなら、いつまでも同じことの繰り返しだ」
「っ！」
シリルがグッと唇を噛んで、今にも泣き出しそうな、苦しげな表情を見せる。

「いいか、まずは自分がどうしたいのか口にしてみろ。今までどうにもならなかったから、言っても変わらないと思ってしまうのは仕方ない。そこを変えていこう。私はシリルの言葉を信じるよ。流れ星を捕まえてくれたお礼だ」

「あの二人には会いたくない。金輪際。もう奪われるのは嫌だ」

ほんの少し、意を決したように、シリルが願いを口にした。

流れ星にお願いするかのように、静かに。

「その願い、私が叶えよう」

それから数日、私はシリルの従兄妹たちについて調べた。

シリルがどんな思いをしてきたか、知りたかったからだ。友人やツテを頼ったおかげでたくさんの情報が耳に入ってきた。

そしてついに、奴らが屋敷にやってきた。

「こんにちは！　おじさま、おばさま！」

応接室でトラティリア一家と一緒に、ガードナー伯爵親子を迎え入れる。

女性らしい服は持ってきていなかったが、トラティリアの使用人たちは大変優秀で、夫人のドレスから飾りを外し、シンプルなワンピースに仕立ててくれた。

深い赤色のタイトなスカートが印象的な、少し大胆な格好になってしまった。公爵夫妻はとても似合うと褒めてくれたが、これでは蹴りの威力が半減してしまう。

なんて非効率的な布なんだと内心思う。

私を見た瞬間、カイルだと思われる青年が目を見張った。どこかの戦場で会っただろうか？　チラッと手に目をやったが、実戦の経験があるようには見えなかった。

少し長めのグレーの髪に、ほんの少しだけシリルに似た眼差し。しかし目つきはきつく、好戦的な印象を受ける。体つきは確かにたくましく、堂々としていた。

とはいえ、見覚えはない。

次にサリアに視線を移すと、彼女はなぜか目つきを強張らせてこちらを睨(にら)んでいた。

カイルと同じ、グレーの髪にグレーの瞳。気が強そうに見える、少し吊り上がった目。

お礼に微笑み返したところ、「ひっ」と声を漏らし、視線を合わせてくれなくなってしまった。

「はじめまして。私ブライトン辺境伯が娘、シーラ・ブライトンです」

「マシュー・ガードナーだ。ザガードの兄にあたる。こちらは息子のカイル。そっちは娘のサリアだ。よろしく」

トラティリア公爵家は、夫人の実家だ。公爵はトラティリア家に婿入りしたかたちになる。

ガードナー伯爵は自分よりも弟の爵位が高いことを気にしているのだろう、決してその部分に触れてこなかった。なぜかとても偉そうに椅子にふんぞり返り、私が差し出した手を、じっと汚いものを見るような目で見つめた。

痩せれば公爵に似ているのだろうが、体型は崩れて腹が邪魔そうだ。子供たちと同じ色の瞳は、私に興味を示すことなくキョロキョロと忙(せわ)しなく辺りを見ている。

是非とも握手をしたかったわけではないので、大人しく手を引っ込めた。
「ご紹介いただきありがとうございます。よろしくお願いします」
「シリルは魅力的な方を婚約者にしたんだね。おめでとう」
私の返事など求めていないとばかりに、ガードナー伯爵はふいっとそっぽを向いた。
敵から目を背けるとは腑抜けめ。と心の中で思ってしまい、つい口元がゆるむ。
ガードナー一家は私を除け者にするように、トラティリア公爵と夫人に話題をぶつける。
やれどうやって婚約者を選んだのかやら、なぜ辺境伯？　やら、シリルとは対照的な相手だから大変そうだ、など。
つまりは、この婚約は認めないと言っているのだ。
公爵はニコニコと笑ったまま、「綺麗な子だろう？　シリルを助けてくれるんだ」と呑気に会話を交わしている。
なかなか真意が伝わらず、ガードナー伯爵はイライラしているようだ。
こんなあからさまに敵意を向けられているのに気がつかないとは、さすが父上の殺気に当てられても倒れなかった鈍感力の持ち主だ。
私は、伯爵がお土産に持ってきてくれたという紅茶に口をつける。
高級な紅茶だと聞いたが、中身が入れ替えられているのだろうか、飲み慣れた大衆用の紅茶の味と香りがした。
ふと視線を感じてそちらを見ると、カイルと目が合った。なぜか、ニヤッと怪しげに笑いかけてくる。それに気づいたサリアが慌てて立ち上がり、シリルの腕を無遠慮に引っ張った。
「ねぇ、シリルの部屋で話そうよ！　久しぶりにゆっくり話をしたいな！」
その言葉を聞いてシリルの顔が青くなる。カイルも「そうだな、それがいいな」と席を立った。
公爵夫人も、「あら、じゃあ部屋に案内するわね」とつられて立ち上がろうとする。
私は夫人を手で制した。
「では、私が案内いたしましょう。お義母様はお茶を楽しんで。……ガードナー伯爵、今年は隣国の紅茶が豊作だったようですわね。お土産の紅茶、ごちそうさまでした。とても懐かしい味で、久しぶりに実家に帰ったような気持ちになりましたわ。ではお二人、こちらへ」
伯爵がカッと顔色を赤くした。
隣国の紅茶といえば大衆用の、安価なものだ。あの国は国土も広ければ働き手も多い。おかげで大量生産が可能で、価格も抑えられる。
国境に面した辺境伯領では、自国のものだけでなく隣国の紅茶も多く親しまれているのだ。
味の違いなどわかるまいとでも思ったのだろうか。
土産をケチるなんてみっともないな、と暗に伝えたのだ。
こんな小娘に指摘されるとは思わなかったのか、伯爵はお怒りになったようだ。
私はシリルの隣を歩いてサリアとカイルを三階へ案内する。
階段を上りきった辺りで、カイルが口火を切った。
「おい。シリルのくせに婚約するなんて、どういうことだよ」

「そうよ！　女の子に興味があったの？　かわいーい趣味ばかりで、全然そんなそぶりもなかったじゃない」
二人がシリルに詰め寄ろうとする。だが私は二人とシリルの間に体を捩じ込み、近づけないようにした。
シリルがギュッと手に力を入れたのがわかる。割り込んだ私が不快だったのか、カイルが嫌そうに顔を歪めてジロッと睨みつけてきた。
「女々しい男だからこんな男っぽい女が来たのか？　余計ナヨナヨして見えるぞ、情けない」
カイルは私のほうをジロジロと見て、ふん、と鼻で笑った。
「体だけは良い体をしている。なぁ、俺が遊んでやるよ。こんな人形遊びが好きな男、つまらないだろ？」
カイルが私の肩に手を置こうとすると、サリアがペチンと手をはたき落とす。私を守ろうとしたわけではないようだが。
「やめなさいよ。こんなアバズレに手を出すの」
「アバズレだからいいんだろ？　後腐れなく捨てられる」
二人の会話には特に返事をせず、部屋の扉を開けた。
「どうぞ」
「あ、そうだ。この間あった黒曜石のカフスボタンもらうな」
「私はブルーサファイアのピアスをもらうわね！　あ！　婚約指輪とかある？　ねぇ、あんたのアクセサリーも見せてよ！　あんた辺境伯でしょ？　私たちは伯爵家よ？　逆らったらどうなるかわかるよね？」
二人はドカドカと無遠慮に部屋へ入り込む。
シリルは呆気に取られたような表情をしていた。
私たちの返事も待たずにドレッサーの引き出しやケースを漁りはじめる二人に、私はそっと囁く。
「物乞い風情がシリルを見下すとは、愚かだな」
「な……なんだと？」
「お前たちは卑しい物乞いだ、と言ったんだ」
ガシャーン!!　と大きな音が響いた。
カイルが腰に差していた鈍刀を引き抜き、ドレッサーの鏡を叩き割ったのだ。
その短慮さに思わず笑い出しそうになってしまった。
「私はお前たちの言いなりにはならない。お前たちとは金輪際関わり合う気がないので今すぐこの屋敷から出ていってもらいたい」
「貴様、伯爵家に楯突く気か!?　おいシリル！　お前、なに見てるんだよ！　この女を追い出せ！また殴られたいのか!?」
シリルはビクッと肩を震わせ、入り口の辺りで尻込みをしているようだった。かわいそうに、顔が真っ青である。
私はどうしたらカイルを挑発できるか考えながら言葉を選んだ。

「自力では女一人追い出せないのか、あなたは？　人に頼まなければできないなんて情けないな」
最大級の侮蔑を込めて笑いかけると、カイルは面白いように真っ赤になった。
「おいてめぇ、馬鹿にしてんのか？　サリア、シリルと廊下に出てろ。この女にわからせてやらなきゃな」
カイルはいやらしく笑った。私のドレスの胸元を思いきり掴み、ニヤニヤと笑いながら顔を近づけてくる。
私がその手を掴んで捻り上げようとした瞬間、シリルが血相を変えて駆け寄ってきた。
「触るな……！」
「はぁ？　俺に言ってんのか？」
小さな声ではあったが、シリルはカイルに歯向かって、手をはたき落とそうとした。力が足りず、逆に弾き飛ばされる形になってしまったが。
弾かれた手をさすりながら、シリルはなおもカイルに噛みつく。
「シーラは、僕の婚約者だ」
「ちょっと、シリルはこっちに来なさいよ！　お兄様が命令してるでしょ？」
いつもと様子が違うシリルに戸惑いながら、サリアがシリルの手を引いて、私から引き離そうとした。
「シーラに触らないで！」
カイルはシリルの一言でついに切れたのか、剣を思いきり振り上げた。私は咄嗟にシリルの首根っこを引っ張って後ろへ放り投げる。ついでにくっついていたサリアもドサッと床に倒れ込んだ。
荒々しく振り下ろされた剣先は、私の前髪を掠めてワンピースの前身頃を切り裂く。
無駄に育った胸が役に立ったようで肌には傷がつくことなく、布だけが無惨に臍の辺りまで切れた。
そうなるように避けたのだが。しかし……
「遅いな」
あまりの剣筋の遅さに、つい本音が漏れてしまった。
「てめぇ!!」
それに反応したカイルが拳で私の腹を殴りつけた。が、片手で受け止めて逆にカイルの頬を平手で思いきり叩く。
カイルはまるで埃のように、ピューッと壁に向かって飛んでいった。
サリアが「きゃーーっ！」と悲鳴を上げてシリルに抱きつこうとした。
髪留めを素早く引き抜き、サリアに向かって投げる。それがサリアとシリルのちょうど間にザクッと刺さると、二人は顔を青くして距離を取った。
「さわるな。私の旦那様だ……未来のな」
ほんの少し威圧をかけると、サリアはその場でボロボロ泣き出してしまった。
そこへバタバタと大人たちが到着した。
部屋の状況を見て、すぐに伯爵が噴火する。

「どういうことだ!!」
伯爵は怒り狂って私に詰め寄った。
「貴様！　なにをした!!」
「お二人が急に私の部屋に入ってきて、宝石類を盗みはじめたのを止めたところ襲われたので、反撃したまでです」
ほら、と切り裂かれた胸元を見せる。公爵と夫人が短く悲鳴を上げた。特に傷はついていないのに心配してくれるとは、優しいご夫妻だ。
「そんなことどうでもいい!!　息子と娘に暴力を働いてタダで済むと思うなよ、そもそもこの家の物なら我が家の物も同然だ！　ここの嫁になるならお前もそれをわきまえて……」
「なぜ？」
ぴちぴちと唾を飛ばしながら当然のように怒り散らしている伯爵の言葉を遮り、ほんの少し殺気を混ぜて聞き返す。
伯爵はビクッと肩を弾ませ、一瞬怯んだ。
「……は？」
「なぜ伯爵ごときが偉そうにしているのかと聞いている」
伯爵は突然の口答えに驚いたのか、池の魚のように口をパクパクさせている。そこだけは血筋なのか、最近こんな顔をよく見る気がする。
「お義父様。なぜシリルを守らずこんな男の言いなりになっているのです？」

さすがの公爵も正面から殺気を向けられたら気がつくようだ。ほんの少し後ずさりしつつ、それでも私をじっと見つめて申し訳なさそうな顔をした。
「そ……それは……」
「シーラちゃん、それは私が……」
「元の婚約者であったガードナー伯爵を裏切ったから逆らえない、そう思ってます？」
公爵夫人は両手を口に当てて、ハッと息をのんだ。公爵も目を見開いている。
この数日、友人に頼んで調べてもらった彼らの過去。
聞けば聞くほどに醜聞が集まった。
「そ……そうだ！　この裏切り者のせいで俺は人生をメチャクチャにされたんだ！　だから……」
ガードナー伯爵はここぞとばかりに反撃を開始する。だが。
「浮気三昧だったからだろ？　その結果メイドとの間にカイル殿を授かって、こちらに婿入りできなくなった、と」
もちろん、それは伯爵の醜聞だ。トラティリア夫人と公爵には、なんの落ち度もない。
反論しようのない真実だったからか、ガードナー伯爵はグッと唇を噛んで悔しそうな顔をした。
「お義父様、こいつらは婚約指輪まで差し出せと言ってきました。今までもシリルの大切なものをそうやって奪ってきたはずです。報復が怖いのですか？　伯爵程度の男の？　そんなもの、私が全て弾いてやります。むしろ報復するのならお覚悟を。この私がその前に捻り潰して差し上げましょう」

目の前で力強く拳を握ると、パキパキと小さな音が部屋に響く。
シン、と静まり返った部屋に伯爵の悪あがきがこだました。
「お……お前みたいな小娘一人でなにができる!!」
「おや、私一人では不服か？　それなら仕方がない、応援でも呼ぶことにしようか。呼べば助けに来てくれる者には心当たりがあるからな。さて……本当に私を敵にまわす覚悟があるのか？」
本気の殺気を向けるとガードナー伯爵は顔を真っ青にして倒れてしまった。
だが、今度は吹っ飛んで意識を失っていたカイルが体を起こし、剣に手を伸ばす。
「引き際も知らない小僧が。死にたいのか」
その剣を足で踏みつける。グッと力を入れると、バキンと音を立てて刃が折れた。
「え？」
「次に刃を向けたら私も剣を抜く」
「……!!」
カイルは泡を吹いて、再び倒れてしまった。
後から来た使用人たちは皆、手を叩いて喜んでいる。伯爵たちは今までこの屋敷でやりたい放題だったようだ。
公爵夫妻はシリルのもとへ行き、すまなかった、と謝っている。
私は伯爵親子の足を掴んで引きずり玄関前のポーチにポイポイと捨てておく。頭をしこたま打っていたが、これで少しはマシになるのではないだろうか。私は優しいから、階段だけは腕のほうを

持って運んでやったし。
サリアだけは意識を取り戻し、自らの脚で転がるようにして逃げていった。
呆気ないことだった。これで済ませる気は毛頭ないが。
塩を撒く執事や使用人をよそに玄関の扉を閉めて振り返る。
そこには、怒った顔のシリルが立っていた。
「どうした？　もう大丈夫だ」
「……君が傷つくとは聞いてない！」
そう言って、私の体を隠すように真っ白なシーツを優しく巻きつける。私よりも身長が高いシリルを少し見上げると、彼はプイッと横を向いてしまった。
「傷はついていない」
「よく見たら傷があるかもしれない！　それに、あんな酷いことを言われていた。僕のせいで。大丈夫じゃないよ！」
白く滑らかなシリルの頬に指を添わせて優しく撫でると、かぁ、と赤くなった。
「優しいな」
「よ、弱虫だと、思ってるんだろ？」
青く透き通る瞳から一粒ずつ、綺麗な雫が静かにこぼれ落ちる。
時々しゃくりあげるようにして、シリルは泣いていた。
「いいや、思わないが」

「男のくせに、やられっぱなしで、情けないって」
「思わない」
「……君は変だ」
「ふっ……」
いじけるように呟いたシリルがおかしくて、つい吹き出してしまった。
シリルが驚いたように目を見開く。失礼なことをしたかと思って謝ろうとしたが、シリルはふいっと後ろを向いて歩き去ってしまった。
それからメイドの者たちが慌てて私を風呂へ連れていき、身支度を整えてくれた。幸いシリルが気にしていたような傷は一つもついていなかった。
「……町へ、行かないか？」
伯爵親子に荒らされた部屋を使用人たちが片づけてくれている間、ラウンジでお茶をしていると、先ほどよりしっかりした服装に着替えたシリルが、ものすごく小さな声で誘ってきた。
戦場でどんな小さな声も聞こえるように訓練をしてきたおかげで比較的はっきりと聞こえたが、なんと答えたらいいか一瞬悩んだ隙にシリルは不安を爆発させたようで、「やっぱりいい!!」と早々に己の発言を撤回し、そそくさと退室しようとした。
「いや、待て。案内してくれるのなら喜んで行こう。先日は一人だったせいでなかなかに大変だったんだ」
「……僕と行っても似たようなものだよ」

「いや、二人で行けば楽しいさ。乗馬はできるか？」
「できない」
「ちょうどいい、アサギがシリルに会いたがっているんだ、一緒に乗っていこう」
「……」
「？」
突然黙ったシリルを不思議に思い、じっと見つめて待つ。ふと、シリルが柔らかく笑った。ほんの一瞬だったが、表情がパッと華やいでいた。
「乗馬ができなくて馬鹿にされたことはあっても、ちょうどいいと言われたことはなかったな」
「そ……そうか。また無神経なことを言ったか？　すまない。その……一緒に乗ってくれないだろうかと誘おうと思っただけで……」
「わかってる。ありがとう、一緒に乗せてくれる？」
どうやら、シリルは私の無神経さを把握したらしい。己の中で私の言葉を侮辱ではないものとして受け止めたようだ。他人を怒らせてしまうことがある私は、シリルの心の穏やかさを感じた。
少しホッとしてシリルを見ると、彼も微笑んでいた。
人に理解してもらうというのは嬉しいものなんだな。
「あぁ、もちろん」
初めの頃と比べると、シリルの言葉が柔らかくなったような気がする。
攻撃される前に攻撃をしなければと、今まで強がっていたのだろう。

さてアサギを迎えに行こうかと椅子を立ったところで、足にまとわりつく邪魔な布に気がついた。
ムッと顔をしかめてばさりとスカートをまくってみると途端にシリルが顔を赤らめ、慌てて後ろを向いてしまった。
「ぼ、僕のことをなんとも思っていないのはわかっているが、誰の前でも足を出すのははしたないよ！　今メイドを呼ぶから、着替えるといい」
「なんとも思ってない？」
「ああ、ちゃんと君が僕のことを愛することがないことは理解しているから……」
「夫婦になるんだから、シリルのことはちゃんと大切に思うようにしているよ」
「へ？　あ……でも……」
シリルはアタフタしはじめた。
あぁ、そうか。シリルは結婚を望んでいないから、自分も私のことを愛さなければいけないのかと戸惑っているんだ。
「あー！　いいんだ、同じ気持ちを返せとは言わない。見返りを求めて誰かを大切に思ったことは一度もないから、いつものことだ。気にしなくていい。ただ、私はシリルを大切にすると誓うよ」
人と関わることを怖がっているシリルには負担だろうと思い、私を愛する必要はないと伝えたつもりだったが、なぜか彼はさらに眉間に深い皺を寄せて、傷ついたような表情になった。
どうした？　と声をかけようとしたところでメイドが着替えを持ってきたため、その話はそこで終わってしまった。

公爵家のメイドたちは腕がよく、あっという間に着替えが済んだ。
馬に乗るには邪魔になるので、長い髪を無造作にリボンで縛る。
「あ、もったいない……」
とメイドたちは手を出したそうにしていたが、シリルが現れたので手を引っ込めて壁際へ下がっていった。
「……櫛を」
私をじっと見たシリルは、うん、とうなずいてからメイドに櫛を持ってこさせた。
私を椅子に座らせると優しく髪を梳き、慣れた手つきで髪をひとまとめにした。
よくわからないが、縄のようにグリグリと編まれた髪がカチューシャのように頭の上を這い、後ろでグルグルにまとめられた髪の周りにも縄のように髪が巻かれている。
「これはすごい。シリルは器用だな」
「毎日自分の髪をまとめているからね」
「そうか。こんなに綺麗にねじれた髪は見たことがない。また頼んでもいいか？」
「ねじれ……編み込んだと言ってくれるかな？」
「私にはできないからな、すごく綺麗だ！」
崩さないように指でそっと髪をなぞる。触れば触るほど、どうなっているのかわからない。
鏡と睨めっこしていると、フッとシリルが顔を背けて吹き出した。
「さぁ、行こう」

お忍びの外出だ。
シリルはいつの間にか羽織っていた黒い外套のフードを目深にかぶり、まるで自分に言い聞かせるように呟いた。
馬舎につくとアサギが嬉しそうにブルブルと鳴いた。
先に私がアサギにまたがり、背が高いシリルには後ろに乗ってもらった。手綱を握れないので、腰に手をしっかり回してもらう。
アサギは頭のいい馬だ。シリルの緊張を感じてか、普段より穏やかに歩いてくれている。シリルも少しずつ慣れてきたようで、強張っていた腕の力が徐々に抜けてきた。
町に到着すると、ふう、と一つ大きく息を吐いた。
ちょうどお昼を過ぎた辺りだったので、屋台の並ぶ市場は人で賑わっていた。
「シリル！　これはなんだ？」
「クレープだよ。食べる？　甘いのとしょっぱいの、どっちがいい？」
「じゃあ、両方で」
「……他にもたくさんあるから一つにしておくといい」
「そうか。じゃあ、肉系がいいな！」
「系ってなんなんだ？」
シリルは終始ソワソワした様子でなるべく人と目が合わないようにしていたが、私がなにかに興味を持つと率先して買ってくれた。品物を受け取ると脱兎のごとく店から離れてしまうので、皆とても怪しんでいたが。
買ったものは、歩きながら食べられるものばかりだった。賑やかな市場をフラフラ食べ歩いていると、いつの間にかシリルとはぐれてしまった。
きっと不安がっているに違いない。路地裏に入って近くの塀をつたい、建物の屋根に上がる。
ざっと見渡してみるが、黒いフードをかぶった人物は見当たらない。
しばらく見渡していると、慌てて路地裏に入っていく怪しい人影が目に入った。そのまま屋根を辿って追いかけると、隅のほうで小さく丸まったシリルを見つけた。
「どうした？　お腹でも痛くなったのか？」
「……僕を知っている人に出会ってしまった。正体がバレた！　きっとみんな今頃、悪口を言っているんだ‼」
シリルは小さく震えながら、フードをさらに深くかぶり直す。
「どんな悪口だ？　どこにいるやつだ？」
「そこの、肉屋の男だ。屋敷にも納品しに来ているんだ」
「じゃあ、行こう」
震えるシリルの手をガッと掴んでにっこり笑う。シリルの顔色がサッと悪くなった。いや、もともと悪かったかもしれない。
手を引いて立ち上がらせると、そのまま引っ張って店の前まで連れていった。

店の前につく頃には、シリルが無駄に抵抗するせいでフードが外れてしまっていた。
「あ！　やっぱりシリル様だ！」
ちょうど肉屋の店主が店先に顔を出していて、大きな声でシリルを呼んだ。
シリルが「早く逃げなきゃ！」と小さく叫び、逃げようとしたので、ぎゅっと手を握って動けないようにした。
「ちゃんと最後まで聞くんだ。それがもし、シリルを傷つけるものだったなら……」
とりあえず安心させないといけない。そっと耳元で囁くと、シリルの耳がカッと赤くなった。
「僕の悪口だったら……どうするんだ？」
それでもその先が気になるようで、ごくりと唾をのみ込みながら返事をしてくれた。
「捻り潰す。もう二度と歯向かう気力が湧かないほどに」
力強く拳を握ると、バキバキと骨が鳴る音がした。
肉屋の店主を気にしていたはずのシリルだが、それよりもその音が気になったらしい。逃げようとしていた足を、大人しくその場に停止させた。
「シリル様！　町にいらっしゃるなんてお久しぶりではないですか？　このコロッケ、揚げたてなんですよ！　よかったら召し上がってください！」
肉屋の店主はニコニコと笑いながらシリルにトングでコロッケを差し出す。後ろからやってきたおかみさんがバコンとお盆で店主の頭をはたいた。
「あんた！　シリル様にそのまま渡すんじゃない、紙に包むんだよ！　すみませんねぇシリル様、

そういえば先日、夜中に見まわりをしてくださっていたでしょう？　ありがとうございます」
肉屋の夫婦は嬉しそうに笑みを浮かべてシリルに近づいてきた。その明るい声を聞きつけて、周りの人々がわらわらと集まってくる。
「シリル様だって？　街灯をうちの裏につけてくださって、ありがとうございます！」
「お久しぶりです！　大きくなられましたね。またうちのパン屋にも来てください！」
先日私が訪れた時。皆シリルにお礼を伝えたい、それなのになかなか姿を現してくれないと、心配していた。悪口など言うはずがないのだ。
なぜか私が誇らしい気持ちになって腕を組んで見ていると、小さな女の子たちが近づいてきた。
「ねぇ、あなたは王子様なの？」
「私？　いや、違うが」
「シリル様は、私たちのお姫様なの。だっていつも綺麗だから。あなたはシリル様の王子様？」
「うーん……王子様ではないけど……そうだな、私はシリルの騎士だ」
そう言って腰に差した細剣に手をかけると、女の子はブワッと目を輝かせて可愛らしく叫んだ。
「わあああ！　かっこいいー！」
「この町のことも守るから、困ったら言いに来るんだよ。私はシリルと一緒に暮らしているから」
「うん、ねぇ、騎士様！　今度私たちの教会にも遊びに来て！」
「いいよ。今度顔を出させてもらう」
私が微笑むと、女の子たちはきゃぁー！　と嬉しそうに叫びながら走っていってしまった。

シリルのほうを見ると、なぜか両手いっぱいに食べ物や花などのプレゼントを持たされていた。
あんなに厳重にかぶっていたフードにも果物や野菜がたくさん詰まっていて、もう一度かぶるのは無理そうだった。
ふと目が合うと、シリルは嬉しそうにニッコリと笑う。
なぜか、心臓の辺りがドクンと痛んだ。

シリルとの町散歩はなかなかに楽しいものになった。土産をたくさん持って帰ってきたシリルを見て、公爵夫妻はとても喜んでいた。
少しずつ、シリルの心も解きほぐされているようだ。
シリルはもっと、胸を張って生きていいはずだ。だが、それを許さない者がいる。
――手はじめに、奴に連絡をして協力してもらえるか聞いてみるか。
一人で乗り込むこともできるが、なるべくなら大がかりなほうがいい。
あの親子には、二度とトラティリアに手出しをしたくなくなるようなお仕置きをしてやらねばならないからな。

立ち読みサンプル
はここまで

第三章

準備を整える間に、子供たちと約束をした教会を訪ねてみることにした。
この町の教会は親を亡くした子や、訳あって親元を離れている子を預かって育てる孤児院の役割も果たしている。
トラティリア公爵家の援助や町の人たちからの寄付のほか、教会自体でもバザーや祭りを開いて資金を調達している。
現在は二十名ほどの子供が暮らしているそうだ。メイドたちに孤児院を訪ねることを前日に報告すると、皆でクッキーやビスケットなど日持ちのするお菓子を焼いてくれた。
シリルもメイドたちの動きに気がついて、パンやマフィンなどを用意してくれた。
そして、朝にはたくさんのバスケットを抱えて玄関で待っていた。
「僕も行く。ちょうど様子を見に行こうと思っていたところだったんだ」
少しはにかみながら告げるシリルからは、ほんのり香ばしい小麦粉の香りと砂糖が混じったお菓子の甘い香りがした。きっと今朝も焼いていたのだろう。
一緒にバスケットを持っていたメイドたちが嬉しそうに微笑んでいる。
「シリルも来てくれるならきっと、みんな喜ぶな」